Meiji Institute of Philosophies (MIPs)

鼎談「生き方としての哲学 ── ピエール・アド『ウィトゲンシュタインと言語の限界』をめぐって」

合田正人×古田徹也×池田喬

2024 年 3 月 1 日（金）17:00-19:00

明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント 17 階グローバルラウンジ

アクセスマップ　https://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/access.html

キャンパスマップ　https://www.meiji.ac.jp/koho/campus_guide/suruga/campus.html

主催：明治大学文学部心理社会学科哲学専攻

参加自由・無料

20 世紀フランスの古代哲学研究者であった P. アド（1922-2010）はフーコーに見出され、フーコーと比較されてきた。「古代哲学全体が、発語の存在論的価値と呼びうるものを信じていた。「生き生きとした活力ある」言説が弟子の魂を変容させるものである」。魂を変容させるこのような「生き方としての哲学」は 20 世紀の哲学にはもはや存在しないのだろうか。

そうではない。上記の引用文は、昨年、翻訳刊行された『ウィトゲンシュタインと言語の限界』に現れるものである。1960 年代前後にフランスで初めてウィトゲンシュタインについて語られたとも言われるこの書において、アドは、ウィトゲンシュタインを 20 世紀以降の分析哲学や論理学の領域だけでなく、それよりもむしろ、古代懐疑主義、ストア派、ゲーテ、ショーペンハウアーを含んだ西洋哲学史の全体に位置付けていた。そして、アドが、ウィトゲンシュタインに近い現代の哲学者として挙げるのは、ハイデガーやメルロ＝ポンティといった現象学者である。

現代哲学の全体を再考させるに十分なインパクトを放つ、アドのこのウィトゲンシュタイン論について、本書の翻訳者である合田正人、本書の解説を著したウィトゲンシュタイン研究者である古田徹也、この集まりの企画者でありハイデガー研究者の池田喬による鼎談を開催する。生き方としての哲学、魂の変容としての哲学という、現代において失われつつあるようで、現代の最大の哲学者とよく並び称される二人 ── ウィトゲンシュタインとハイデガー ── に共有されていたと見られるそうした哲学のあり方についても話し合いたい。

参考文献

アド、P. 『ウィトゲンシュタインと言語の限界』（合田正人訳、古田徹也解説）、講談社、2022年.

アド、P.『生き方としての哲学 ── J.カルリエ, A. I.デイヴィッドソンとの対決』(小黒和子訳)、法政大学出版局、2021 年.

アド、P.『イシスのヴェール ── 自然概念の歴史をめぐるエッセー』（小黒和子訳）、法政大学出版局、2020 年.